空間・社会・地理思想 6号 150-160頁, 2001年
Space, Society and Geographical Thought

地理学の新しいフェミニスト歴史叙述をめざして

モナ・ドモシュ*
(齋藤　元子**訳)

Mona DOMOSH
Toward a feminist historiography of geography
Transaction. Institute of British Geographers, New Series, 16, pp.95-104, 1991

要約

地理学史を分脈化しようとする近年の試みは、その歴史の多くがジェンダー化された構築物であるということを無視している。また一方、ポストモダン人文地理学のための主張はフェミニスト理論を無視している。ヴィクトリア期の女性探検家の話を検証することによって、本エッセイはいかに女性が地理学的知識の形成に貢献したかを提言し、それとなく、知るということの女性による方法が、人文地理学の再構築に貢献するものを考慮することによって、何を学び得るかを問うている。

キーワード：探検家、女性、地理学史、ポストモダン、フェミニスト理論

> 我々の歴史が地球上の最も遠い果てに到達したというような記録を含むのはまた、プライドの問題である。Conrad（訳者注：ポーランド生まれの英国の海洋小説家1857－1924）に敬礼しよう。偉大な男たちの好戦的地理学における努力と勝ち取ることが困難な成功；自らの才能に従い、さまざまな動機によって歩みを進めた男たち…しかし各々が心の中に神聖な炎の閃光を抱いていた。もしこの閃光が死に絶えてしまったとしたら、我々の地理学は真に乾いた血の気のないものになってしまうだろう。
>
> (Stoddart, 1986, p.157)

> ありのまま、Estes Park は私のものである。それは調査されておらず、人に所有されておらず、愛と占有と感謝という理由によって私のものである。その比類なき日の出と日の入り、その見事な夕焼け、その燃えるような月、その鋭く恐ろしいハリケーン、そのワイルドなオーロラ、山と森、深い渓谷、湖、川、そしてそれらすべてを私の心の中でステレオタイプ化したもの、Estes Park の壮観を占有することによって、Estes Park は私のものである。(Bird, 1879, p.120)

Stoddart が提言しているように、もし地理学史においてよりヒーロー的なエピソードの多くが彼らを旅に駆り出そうとする心の中の閃光の結果であるならば、地理学は真に啓蒙主義の潮流の下位のものである。その潮流とは世界に光をもたらすであろう閃光に勢力を与え規定するものである。そして、二番目の引用が明らかにしているように、そのような探検への閃光は女性の探検家の著述にも男性の探検家と同様に明白である。Isabella Bird のロッキー山脈への旅に関する今日の解釈は、人間が未だ支配していない土地を愛を通じて占有しようとする彼女の能力について、政治的に協議しなければならない事項が提示されてはいるけれども、発見や彼女が見いだしたものへの驚きの興奮は、Stoddart (1986)によって概略されたような男性の探検の伝統の境界内に、彼女を十分に位置させるのを否定し得ない。J.K.Wright(1947)の言う人々を未知の土地へといざなう「サイレン」は、スコットランドの家族から離れ一人で馬の背にまたがりロッキー山脈の中に入っていくという冒険を Bird に敢行させる動機として確かに作用していた。しかし Isabella Bird やほかの多くの女性旅行家の著作は地理学史には含まれておらず、地理学史編纂のために冒険的伝統の回復を試みた

* フロリダ大西洋大学
** お茶の水女子大学・院

Stoddartの著書においてさえも例外ではない。それが新しい土地であろうと思想であろうと、発見の興奮が消されるべきでない閃光のひとつであることを我々は確かに否定することはできない。そして冒険的伝統における地理学のルーツも、Stoddartが指摘するように、確かに鼓舞的でありプライドの源泉として作用すべきものである。しかしながら、その伝統のごく一部分だけが地理学という学問の公式な歴史として記憶され記録される時、問題性を帯びてくる。それによって、地理学はその歴史のある部分を喪失し、地理学者が地理学的思考の再構築に関してアイデアの源をはるか遠くへ捜し求める時(Cosgrove, 1988; Dear, 1988; Daniels, 1989)、この喪失はより深刻な問題となってくる。

地理学史を書き直し文脈化しようとする最近の試み(Livengstone,1988;Driver,1988)の場合、それはこれまで見過ごしてきた話を我々自身の歴史から取り戻すことを我々に義務づけようとする。女性の旅行家に関する近年の取り組みは地理学の歴史に全く新しい一章を開くものであり、そこから我々はポストモダン的再構築のための資源を再獲得できる(Birkett, 1989; Middleton, 1982; Tinling, 1989)。本エッセイはこれらの可能な資源を指摘することを目指している。本エッセイはヴィクトリア期及びその後の女性旅行家の著述を参考にして「考えることの女性的なやり方」(Belenky他, 1986)が地理学の歴史を我々が書き直すために、そして暗に地理学のフェミニスト歴史叙述(feminist historiography ofgeography)のために、何を貢献できるかを提言する。

これらの女性冒険家の経験に焦点を当てることにより、彼女たちのみが地理学の歴史から組織的に排除された唯一のグループであることを暗示しようとしているのではない。男性であれ女性であれ、その見解や行動が科学的地理学の水準に一致しないという理由により、多くの個人が地理学界の話から無視されてきた。しかし私が言いたいのはヴィクトリア期の女性旅行家の経験は男性旅行家のそれとは異なるということである。このことは男女間の本質的な違いのいかなる声明をも意味するものではない。ヴィクトリア期の女性冒険家のみが彼女たちが生きていた文脈(コンテキスト)ー意義深く適切に文書で証明する方法において示された男性のそれとはかなり異なった文脈からのがれられなかったのである。そしてそれらの文脈は彼女たちの個人的な問題に関する見解や社会的なネットワークの構造を形作るのみならず、旅において彼女たちが利用でき得る資源やサポート・ネットワークが制限されていたことにより、まさに物理的な点において作用した。

本エッセイは地理学内部ならびにポストモダン的傾向とよばれているものにかかわる他の社会科学においてなされている最近の議論からインスピレーションの多くを得ている。ポストモダニズムの問題は複雑であり、人文科学のレンズを通してフィルターにかけられるにつれ、異なった批判や解釈を供給している。啓蒙主義以来我々に深く根付いている哲学的体系を支持してきた仮説に疑問を投じることにおいて、ポストモダニズムの問題は、我々により十分に探求しなければならない思考の方法に可能性の道を開く。ポストモダン的傾向によって生起させられた問題はここでは論じ尽くせないものなので、私は地理学におけるフェミニスト歴史叙述(feminist historiography)に関する私の議論に直接関連するものに限ってのみ概説することにする。フェミニスト理論とポストモダニズムの間に緊張関係が存在することは認識しているが[1]、これら女性旅行家の声を聞き正しく評価することを可能にしたポストモダニズムの局面に集中したいと思う。特に、知識、客観性、言語に関する啓蒙主義の概念を再査定し脱構築することによりIsabella Birdのような女性を見聞することが可能な空間を供給する。ここではごく簡略な議論しか展開できないが、本エッセイの基礎をなすポストモダニズムのいくつかの特徴的要素を概略することは、ヴィクトリア期女性旅行家の話を語り直すことの重要性を我々が理解するのを助ける。

手短に言えば、ポストモダンの脱構築は知識というものがイデオロギー的にまた社会的に構築されたものであり、それゆえ特定の文脈から切り離すことは不可能であることを我々に理解させ得た。よって知識というものは社会的関係の偶然性に依存しているので普遍的真理も普遍化する言説もあり得ないことになる。特定の見方に偏らない知識にほかならない考えが特定の時空間の産物として露わにされ、それゆえに、それが引き出される社会状況や権力関係(ジェンダーのそれを含む)を反映し規定するものとして見られる。

主体からともかくも離れた世界、つまり抽象化された客観的な世界が存在するという考えは、特定の見方に偏らない知識が依拠する仮定として晒される。我々

は世界というものを唯一我々自身の偶発的出来事、それらは我々の物理的、社会的そして歴史的経験を含むが…、の展望によってのみ研究することができる。比喩的、文字通り双方の意味において世界を探求することは、観察者として主体の実際の参加を含む。言語は観察に形態を与えることによってその参加を体現し修飾する。その形態は単独の現実の直接表現ではない－言語は明白なものではない－。だがその代わり、ある世界の特定の見方を反映する。ポストモダニズム的批評は社会的に構築されたものとして言葉と対象両方を見ることを我々に許す。女性旅行家に関する以下の議論は、知識、客観性、言語の使用についてのポストモダン的見方のこの展望の中に基礎を置く。

女性探検家の文脈

まずはじめに、なぜこれらの女性の話が地理学の公式な歴史から排除されてきたかを考えることは価値がある。これら女性旅行家の多くはヴィクトリア期のイギリスの上中流階級に生まれた。この時期は大学の学問が職業化した時期でもある。「科学者」としての適切な地位を授ける大学教育へのアクセスを拒まれたことにより、Mary Kingsley、Mary Gaunt、Isabella Bird、Marianne North といった女性は，探検の意味でのフィールドワークが適切な財源をもった誰に対しても開かれているように、彼女たちにも開かれていると知った。しかし、一般に学問は職業化し、特に地理学は厳密に限定されるようになったので、これらの女性たちは新たに限定された「地理学者」という肩書から排除された。「専門家」としての地理学者のフィールドワークは科学的学問の進歩を目的として成文化され規定された。地理学的調査としてのフィールドワークは少数のエリート白人男性に制限され、イングランドにおける Royal Geographic Society (RGS) や米国の American Geographical Society の男性クラブ的な雰囲気の中で育まれた。

1915年まで女性はRGSのメンバーに選ばれなかった。そして30年に及ぶ戦いの話はヴィクトリア期における男性文化の偏愛と偏見を露わにしている(Middleton, 1982)。それ以前にも女性がメンバーに選ばれたことがあったが、それは例外であった。幾人かの女性メンバーが一つの傾向を象徴しているかもしれないことが明らかになった時、女性への門戸は事実上閉ざされた。1893年に12名の女性がフェロー（仲間）として選ばれた直後にその他の女性に対するメンバーシップは打ち切られた。Birkett が指摘したように、女性に対する反対の多くは、適切な地理学的知識の見地から表明され始めた。女性旅行家は真に地理学的知識に何も付け加えないと考えられた。－換言すれば、彼女たちは新しい土地を調査していないのでメンバーシップの資格を得ることはできなかった。「新たな」地理学的知識をそのように要求することはメンバーシップを希望する男性に対しては決して適応されなかったにもかかわらず…。あるメンバーが尋ねたように、彼女たちは「若くて美人」であるべきかあるいは「年配で科学的知識がある」べきか（Birkett,1989,p.219）？アジアから帰国した George Curzon は、女性メンバーに反対する熱烈なスピーカーであった：彼女たちの性と身につけたことは彼女たちを等しく探検に不適確とし、アメリカが近年我々に慣れさせてくれた女性の専門的に地球を小走りする人という属は 19 世紀後半の恐怖の一つである(Middleton,1982,p.13 より引用)。Curzon と彼のグループはそれらの「専門的に地球を小走りする人」を専門的地理学者にすることを妨げるのに影響力をもった。

組織的な支援を拒まれたため、ヴィクトリア期の女性は自費で自らの文脈において探検し旅した。彼女たちの孤独な旅は十分な規模の探検によってより追求されることも組織にスポンサーになってもらう（男性の探検家にはよくあることだが）こともなかった。したがって彼女たちの名前が生き残るのは、あったとしても、彼女たちの著作を通じてであり、是認された功業を通じてではない。彼女たちの話は地理学の制度的な歴史の一部をなさなかったし、現在もなしていない。地理学に関する男性の話を書く点においては Stoddart が唯一の人物ではないが、地理学における探検の伝統を褒めたたえることによって、彼が女性を排除したことは他の多くの書き手よりもさらに見え透いた行為である。多くの女性探検家に精力を与えた「閃光」は、自ら想像することもできなかった場所へ彼女たちを連れていった。そしてそのことは我々が認識していたよりもはるかに多くの貢献を地理学的知識に対して行った。

女性と地理学的知識

もし科学におけるポストクーン批判が我々に何かを教えたとするならば、それは知識とは社会的にそれゆえイデオロギー的に構築されたものであるということである。つまりそれはある客観的真実の産物であるのと同じだけそれを定義した人の産物でもある。前述した「探検」の再定義の場合は地理学のフィールドの主眼点を明らかにしている。そしてポストモダン地理学のための挑戦の一つは知識を構成するものを定義することの主観性となんとかして折り合いをつけることである。女性旅行家の話は非常に多彩であるが、ある共通の筋道を分かち合っており、その一つは彼女たちが旅の個人的なゴールをかなりはっきりと認識していた点である。新しい場所のいわゆる客観的な発見は彼女たち自身の発見と分離していない。

女性旅行家はある明確な目標をもって旅に出たが、新しい土地を発見するという意味での「発見」それ自体は目標の一つではなかった(Birkett, 1989; Middleton, 1982)。これら女性旅行家の多くは、彼女たちが若いころ想像するだけであったような生き方を始めたのは中年になってからであった。彼女たちの大半は家族の中の誰かが探検に何らかの形で関わりをもっていたような家庭に育ったが、自らが旅に出るのは夢見ることのみ可能であった。彼女たちが自由に旅立てるようになったのは、通常家族への「任務」を全うした後だけであった。発見やある客観的目的を遂行するための旅を正当化するのに役立つ組織から分離させられていたので、女性旅行家たちは広範な意味において自由に旅することができた。Gertrude Bell が述べているように、「私の思考は前に向かって旅し、私はそれらの思考がたどった道筋に従うことを望んだ」(Birkett,1989p.62 より引用)。もし彼女たちの旅を地図に表したとしたら、その道程は、男性探検家の大半が取ったような川の源や山の頂上を目指すかなり直線的な線とは似つかないものであるに違いない。その代わり、彼女たちの道筋はしばしば循環しており、確固たる目的地があったようには見えない。それらはしばしば Stoddart が計画された旅と呼んでいるものの体裁を帯びていた。それはその目的が既に知られている場所の間を単に移動することであり、あまり知られていないルートを横断したことを通じて以外は、知識の付加を何も提示しないものである(1986,p.142)。しかし、そのような外部の組織的な支援が欠如していたからといって、彼女たちが何の導き手も持たなかったというわけではない。彼女たちの指揮は彼女たちの内面の拠り所からきていた。というのは彼女たちの大半が家庭で否定されていたような生き方ができる場所を求めていた。ヴィクトリア期の規範や期待によって制限された世界で成長したので、彼女たちの生活はその規範と期待にかたどられていた。彼女たちの自由はそのような限界から移動した場所で生きることによって発生した。

これらの女性は探検していると自分は力を得ていると感じ、家に戻るとそれが失われてひどく絶望するとしばしば語っている。植民地の権力構造の内部に位置する地域を訪ねた時、彼女たちはその思いを最も鋭く感じる。植民地主義は白人の代表として彼女たちが力をもつことを許す。つまりそれは性ではなく人種に基づいた権力構造の創出であった。この点において、植民地主義に対する彼女たちの政治的な支持や人種間の違いを本質的なものとする確信を我々は理解し始めることができる。彼女たちの生命を覆っていた権力と管理力は彼女たちの人種に基づいていた。つまり一度これらの違いが蝕まれたり消失してしまうと、彼女たちの権力は流出してしまった。旅で遭遇した危険に打ち勝ったことはまた、そのような女性にとって力を得る源であった。そして彼女たちの多くが、大きな誇りをもって、その経験を書き記している。危険な状況は彼女たちに自分の能力を証明する機会を与え－自国では証明することができない能力－、自分の生活状況を管理できる自らの力を証明し得る土壌を提供した。これらの力を得る源は確かに女性に特有のものではない。しかしヴィクトリア期の女性の人生の一般的な文脈を考えてみると、それらは激しく感じられる個人的な力や権威の唯一の源をしばしば提供した。幾人かの女性探検家にとっては、旅で得られる力はしばしば肉体的な無力に打ち勝つ源であった。例えば、Isabella Bird は旅から英国に戻った時深刻な肉体的問題で繰り返し診断を受け、再度旅に出ると症状が消えるということだけが判明した。日本を巡る旅の決断を表明した時、彼女はそれは健康のために勧められていると主張した：

以前に役に立つと証明された方法によって健康を回復

させるために 1878 年4月家を離れることを勧められたので、私は日本に行く決心をした。それは当地の気候の評判の良さ以上に、一人の健康を追求する者に楽しみと回復を本質的にもたらす目新しく持続した興味の源を日本が所有しているという確信がより私を引き付けたからである。(Bird, 1987, p.1)

女性はまたかなりはっきりした特定の理由のために旅をした。しかし彼女たちが追い求めていたものは「客観的な」知識と同じほど多くの力づけと自己知識であった。女性旅行家は目に見えない赤い線に沿って地図を横断し遠くの未知の場所に入って行った。しかし彼女たちが追っていた金のポットは山でも川の源でも砂漠のオアシスでもなく、熱帯の日の光や山の輝きに映し出された自らの長い影であった(Birkett, 1989, p.71)。彼女たちの満足は「新しい」地理学の外面的な発見ではなく、探検のプロセスや自分自身の定義で参加することができる世界を経験することにおいて得られた。

科学的な方法によって特権を与えられた客観性に疑問を投げかけたり、リサーチ・トピック、方法論そして結果の選択がある客観的事実と同じくらい多くのことを我々自身について語っているということを認める際、そのようなゴールが明快に認知されていた地理学的遺産を我々はよく考えるべきである。確かに男性の探検家もまた自己探検に興味をもっていた。しかし彼らの文脈では通常「場所」の外面的発見に優先権を与えることが要求された。組織的な文脈を否定されたことにより、女性はある意味ではより自由に旅をし自らの主観的ゴールをより明確に認識していた。

観察者としての女性：外部からの考察

探検のプロセスは当然両義の意味に取れるものである。一方でそれはそれまで知られていなかった土地や人々をいわゆる開示すること（つまり、西欧文化による「外国人」の探検）を意味すると同時に、他方その開示自体が「発見する」それらの真の社会を変化させ究極的には破壊することをも意味した。探検家の役割もまた当然両義的である：探検家は自分が旅する暮らしや土地の部外者(outsiders)であり部内者(insiders)でもある。つまり観察者であるがしかし参与者でもある。探検の歴史において、これらの見解はしばしば矛盾する。発見することを外部から要求されることがしばしば男性探検家の使命の一部であったので、その結果それらの矛盾は無視されることを意味した。しかし多くの女性探検家は立証できうるほどうまく彼女たちの両義的な役割に対処しえた。彼女たちは女性という性により、日々の生活世界において部外者であり、人生を通じて彼女たちのエネルギーの多くはその事実に付き合うことに費やされてきた。探検家の役割の両義性は彼女たちにとって目新しいものではなかった。女性として、彼女たちの人生はそのジレンマをめぐって作られていた；彼女たちは確かに彼女たちの文化の部内者であり参与者であった。しかし彼女たちは常に権力構造の外部に位置していた。女性たちはそのようなアイデンティティの二重性を共にフィールドに持ち込み、その二重性が非常に役立つことを発見した。自国ではその性ゆえに部外者であったが、フィールドではその人種ゆえに部外者であった。そして彼女たちはその地位の不安定さに気づいた。フィールドにおける彼女たちの権威は部外者としての彼女たちの役割から派生していた－白人の代表として－が、しかしその権威の基盤は、彼女たちが何の権威ももたない文化の部内者として彼女たちを位置付けていたものである。権威の基盤を切り替える彼女たちの技能は、よく研ぎ澄まされたもので、切り替わって「観察者」としての役割の両義性に彼女たちがうまく適応できるようにしたにちがいない。女性旅行家は外国の土地においてしきりに自らのアイデンティティを工作し、同情的だが距離を置いた激しい感情に対処した。そしてこれらの表面上は打ち勝ちがたい利害関係の衝突を解決する必要がない役割の心地よさを見いだしていた(Birkett, 1989, p.176)。

多くのそのような女性たちの同情的な観察者としての性向は、彼女たち自身の文化の中における彼女たちの権威の根拠として作用することができた。したがって彼女たちはフィールド・ワークのユニークさを熱心に支持した。Isabella Bird はたった一人で旅する女性として、他の人が見落としてまうような事柄を観察することができたと記すことを忘れなかった：

一人で旅する女性として、また私がたどったルートにあるいくつかの地域ではじめて見られたヨーロッパ人女性として、私の経験は以前の旅行家のそれとは大幅に異なっていた；そして私は Yoze 原住民を実際に知ることによっ

て今まで以上に充実した彼らに関する話を提供できる。(Bird, 1985, pp.1-2)

フィールド・ワークは主観的な経験に基づいており、読書や大学での勉強や彼女たちの多くが与えられなかった贅沢品によっては得ることができない価値ある洞察を供給したと女性たちは主張することができた。Gertrude Bell 自身は高い教育を受けていたにもかかわらず、直接の経験から得られる知識の貴重さを支持していた。:

> 人は旅出る時、しばしば最新の地図にある道を行き、歴史書で語られた場所に到達する。時間通りに朝早く起床し、新しい国の方に顔を向け、注意深く眺め、苦心して理解しようとする。そしてその苦労にもかかわらず、人は旅に出ずに止まり何冊かの考古学の本を読んでも良かった。しかし私があなたがたに言っておきたいのは、私が取った方法はそのようなものではなかったということである。ここにはどんな本も語ることのできない自分の目で見て心の中に入り込んでくる歴史の世界がある。(Birkett, 1989, p.173 より引用)

皮肉なことに女性の経験を否定し、彼女たちを専門的な地理学者としての地位から除外するために結局利用されたのが、まさにこの知識に対する主張である。地理学的知識に彼女たちが特別な貢献をしたと主張したフィールド・ワークの主観性は、すでに指摘したように、科学的地理学の領域から組織的に排除された。主観性に対する抑圧や観察における両義性の否定は、20 世紀の最初の 10 年に起こった地理学界の正当化や社会科学の専門化の一部であった。しかし文化人類学者やその他の社会科学者が近年主張しているように、フィールド・ワークや民族誌的研究は比喩的な語りにおいて当然実行されており、それらは客観的領域の構築物であるのと同じほどに主観的領域の構築物でもある (Clifford and Marcus, 1986)。主観的なものと客観的なもの－観察者と参与者－の間の差異は曇ってきているということが真に認識されており、それが科学における近年の批評の核心である(Harding, 1986; Sayers, 1987; Grosz, 1987)。世紀転換期における女性旅行家の「前科学的」経験は結局、「新しい」場所についての何らかの情報というよりも、むしろ部外者の役割や観察の方法について彼女たちが我々に語り得るものに、ある意味ではより今日において関連している。

女性の経験を表現すること

女性探検家の経験における生来の両義性は男性探検家の科学的な説明とは異なる表現の形態を必要とした。一つの段階において、彼女たちは男性に限定された仕事に従事する女性であるという事実によって彼女たちが選択できる言語は制限されていた。探検に関する言説を利用することは彼女たちのジェンダーを否定し男性探検家と完全に同一化することであった。未知の土地を「征服」したり「貫通」することは男性の活動であり、探検のルートは男性が自らの男性性を証明する場を与えた。それは海外の土地を女性としてイメージしたり描写することで、女性を抑圧するようにそれらの土地を抑圧することであった(Said, 1979)。女性であることと探検家であることの間の緊張は多くの点で明白であり、どのような服装をするかも含まれていた（男性のようにズボンを履くべきかあるいは丈の長いドレスを着るべきかは常に問題であった）が、言語の選択においてこれらの女性たちは直接その緊張に直面させられた。彼女たちの経験に正当性を与える語彙を捜し求めることは、男性に限定された言語によって周囲を巡らされた世界の境界に彼女たちを不意に踏み込ませるような探求であった [2]。この点において、彼女たちは言語をもちろんのことと思えなかったし、疑いなく言語のあいまいさを認識することを強いられた。

多くの女性旅行家は探検の言語をより良く利用するために自分自身を男性として言及することに専心した。男性の探検の伝統に自己同一化することは、これらの女性に力を与えた。なぜならそれは彼女たち自身の旅を正当化し、異なる人種に及ぼす権威に対する彼女たちの要求を支持したからである。Birkett が指摘しているように、時々彼女たちの男性性への自己同一化は、自分自身を男性と言及することがしばしば無意識になされたほど強いものであった。例えば Mary Kingsley が「私は誘惑に屈服してその頂上に登った3人目のイングリッシュマンである」と書いたように (Birkett, 1989, p.124 より引用)。言語がもつ力に対する彼女たちの認識（たぶん無意識の）は、彼女たちが男性の称号を受け入れていた点や彼女たちがしばしば男性の同伴者に女性の名前を与えていた事実において明らかである。

言語のもつ問題性は多くの女性旅行家にとって、もう一つの段階ー彼女たちの旅を報告する際の主観性と客観性の間の緊張ーにおいて明白であった。言説の客観的様式が専門的地理学の「科学的」世界において嗜好されていることが明らかになった時、多くの女性は彼女たちの記述から「私（I）」を消去した。彼女たちの最初の記述は個人的な回想と事実の観察が混ざりあったものであったが、彼女たちは知識の異なる形態として定義されるであろうものを区別し分離することをすぐに学んだ。Mary Kingsley は初め彼女の西アフリカの旅に関する大きな一冊の本を書くつもりであったが、結局は二冊の別々な本を書き上げた：一つは事実に基づく内容であり、もう一つはより物語り風である。Mary Gaunt はいつも自分の旅に関して事実に基づく旅行記と小説の二つを書いた（Birkett,1989)。この点において、女性たちは再度言語の問題に直面させられた。

表現の問題はポストモダン地理学（Cosgrove, 1989; Cosgrove and Domosh, 1991）とポストモダン社会科学（Clifford and Marcus, 1986）の中心的な関心事の一つとして確認されてきている。議論の焦点がテクストの解読と脱記号化（Duncan and Duncan, 1988）であれ絵や旅行記の適切な利用法(Quoniam, 1988)であれ、言語の純真さを信仰する学問から自由になろうとする試みは、人文地理学の再構築のために多くのチャレンジを提供するであろう。自らの経験が受け入れられる言説の領域の外側に置かれている探検家として、女性たちは早くからそのジレンマに直面することを強いられていた。言語の力を彼女たちが認識することは、言い換えればある特定の世界観をコード化し表象することであり、それゆえその世界観を支持（女性たちが自分自身を男性と言及し男性の同伴者を女性と言及した時のように）するかあるいはその世界観に挑戦するために利用できうることであるが、この認識は地理学とフェミニスト理論双方の内部での言語に関する近年の論争や議論において新たな意味を帯びてきているものである（Irigaray, 1972; Franklin, 1985)。

その他の探検家たち

女性探検家と地理学のその後の話は多くの点においてヴィクトリア期の先輩たちのそれとかなり類似している。同様の考慮すべき問題の多くが次世代の女性探検家たちの活動の特徴をなしていた。彼女たちは女性地理学者協会（The Society of Women Geographers）を連合はしていたが…。ヴィクトリア期の後に探検をしたにもかかわらず、これらの女性たちは、一般的な生活の文脈において、ヴィクトリア期の先輩たちと似ており、同様に科学的学問共同体から排除されていた。Elizabeth Fagg Olds が『Women of the Four Winds』（Annie Smith Peck, Delia J. Akeley, Marguerite Harrison, Louise Arner Boyd）において書いている女性探検家たちは、ヴィクトリア期の女性旅行者と現代の女性科学者の間の Olds が過渡期のグループと呼ぶグループを形成している（Olds, 1985)。依然科学者としての地位を伴わず、しばしば女性という性によって制限された生活を営みながらも、新たな科学者の共同体に入るために、自分たちのヴィクトリアン的過去を破棄した。例えば Louise Arner Boyd は、サンフランシスコ出身の独立した裕福な社交界の名士であったが、彼女は 1920 年代 30 年代の彼女の北極遠征のための資金のほとんどを用意した。しかしながらそのような遠征の多くは公式的にはアメリカ地理学協会(AGS)がスポンサーとなっており、明白な科学的目標をもって着手された。訓練を受けた植物学者、地質学者、測量技師らが彼女の旅の多くに同行し、AGS はそれらの遠征の結果を本にして出版した(Olds, 1985)。Boyd は ASG がスポンサーとなって授与される専門家としての資格証明書を非常に熱心に信奉した。その資格証明書は彼女が自分の旅のために真に最高の科学的な装備器具を購入することを可能にした。

しかし彼女自身は訓練を受けた科学者ではなかったので、それゆえしばしば多くの軽蔑をもって扱われた。：

> 裕福な階級出身できちんとした資格証明書をもつ有名な探検家となった彼女は、当時の大半の女性探検家よりも激しい嘲りに立ち向かう気力を要求された。女性で裕福な社交界の名士であったばかりではなく、彼女は科学者ではなかったからである。そして彼女が思い知ったように、北極探検のフィールドにおいてさえも彼女は紳士きどりの科学者集団に常に受け入れられた訳ではなかった。(Olds, 1985, P.236)

科学的な活動は彼女の探検に絶対必要なものであったにもかかわらず、Boyd の冒険は新しい土地を発見

することを明白に意味しなかった。彼女が調査したいわゆる新しい土地は、偶然に発見されたものであった。：

> Louise は決して「征服」や「発見」のための旅に出なかった；彼女は Miss Boyd Land や the Louise boyd Bank となるものに多少は遭遇したが…。したがって彼女はついに北極に行くことを決心した時、彼女の動機は野心というよりもむしろ好奇心と感情的満足感の必要性によるものであった。(Olds, 1985, p.290)

ヴィクトリア期社会の厳しい束縛に悩まされはしなかったが、にもかかわらず彼女は裕福な女相続人として暮らし、社交パーティーのスポンサーになったり、特定の社交的会合に出席していた。感情的満足感という点において北極探検の冒険が何を与えたかを提言するために我々は想像力を遠くまで働かせる必要はない。ヴィクトリア期の先輩と同様に、Boyd は探検は男性のものであるという伝統のなかで伝統的慣習の多くには従事しなかった。彼女はただ後になって自分が遭遇した氷のフィヨルドに彼女への敬意を表した名前がつけられたことを発見した。：

> De Geer 氷河（そこは 1931 年に幸運にも私が発見したものである）と Jeatte 氷河との間に横たわる土地に「Miss Boyd Land」という名が与えられたことを私はやましく思わない。この土地がそう名付けられたと私が最初に通告を受けたのは、Lange Koch 博士からの手紙においてであり、また同時に彼が出版した地図の中にその名が見られる。(Olds, 1985, p.247 より引用)

このことは Boyd が自分の成し遂げたことに対して高い誇りをもたなかったと言っているのではない。ただ彼女は自分の名前を付けることを業績の認知形態として利用しようとするような伝統（男性の探検家と関連づけられる伝統）の中に自分の身を置かなかった。

我々はただ現代の地理学界のどんな女性たちがヴィクトリア期の探検的遺産を受け継いでいるかを推測できるのみである。学問の専門化は大多数の地理学者を探検という試合場から退去させ、探検の歴史から女性たちを除去した。歴史的熟考によって得られたあと知恵を用いて、我々はヴィクトリア期の女性旅行家の潜在的な貢献をある程度の明快さをもって指摘することができる。；ジェンダーと現代の知識構造に対してそれが意味することについての議論ははるかに不確実なものである(Goodchild と Janelle は 1988 年にこの議論を始めるためのデータのいくつかを我々に提示した)。

ジェンダー・スタディーと知識構築に対するその貢献はいくつかの異なる学問において着手されており、その作業は地理学における議論の道を我々が提言する助けとなり得る。Evelyn Fox Keller(1985)の科学界におけるジェンダーの役割について探求した著作は、特に啓発的であり、Barbara McClintock の植物遺伝学に関する調査に対しての彼女の議論は、女性の科学が男性優位システムの中で完全に作用している科学とは異なっていることを示唆し得るいくつかの方向性を提言している[3]。多分地理学により関連するものとしては、文化人類学における女性とジェンダーの密接な関係についての議論であろう。

『Daughters of the Desert: Women Anthropologists and the Native American Southwest, 1800-1980』において、Barbara Babock と Nancy Parezo はいかに女性文化人類学者が当学問の歴史を形成してきたかを提言した。：

> 休みなく反逆心のある女性たちは、自らのコルセットそしてボストンやニューヨークの客間の家庭生活から自由になることを追い求め、南西部に地形上と心理上の空間のみならず、興味をそそられ成長させてくれるような自分とは異なるものをも見いだした。科学者、人道主義者、ロマンチストそして行動主義者として、彼女たちは南西部のネイティブ・アメリカンに関する文化人類学的理解と公の概念そして政治的政策を特に形作った。(Babcock and Parezo, 1988, p.2)

これらの女性たちの身の上話は、ヴィクトリア期の女性探検家に関する私の論考に照らして見ると、驚くほど類似しているように思える。女性文化人類学者は当学問の公式な歴史においてしばしば無視され、学び得ることや書き得ることが制限され、多くが博物館で働いているにもかかわらず、大学で職を得た者はほとんどいない。文化人類学者 Clark Wissler の考えでは、博物館の仕事は「家事に似ているが故に女性に適している」(Babcock and Parezo, 1988, p.4)。これらの女性文化人類学者のなかでも Elsie Clews Parsons と Ruth Benedict といった最も傑出した人の話でさえ、ヴィクトリア期の旅行家と類似しているように見える。彼女

たちは自らの言説を区分し、妥協を図った。ペンネームを使って詩を書き、科学的で学究的な文化人類学の男性による水準に従うために圧力をかけられてフェミニストとしての著作は封じ込めざるを得なかった(Babcock and Parezo, 1988, p.4)。文化人類学者たちは、当学問の知識構築を形成する際のジェンダーの密接な関わり合いを探求するために、ポスト・モダン傾向によって許された自己回想を使用しはじめた。我々が同じことをやろうとしているのは過去に関してである[4]。

意味すること

地理学のフェミスニト歴史叙述(feminist histriography of geography)を創り出すために我々は何を始められるかを提言することで、本エッセイを締めくくりたい。まず第一に、我々は地理学の定義を広範囲化する必要がある。そうすれば我々の歴史において、自分自身を「偉大な」西欧の思想家の規範ーJ.K.Wrightが「相対的に小さな核のエリア」と呼んだもの(1974, p.81)ーに限定しなくなる。Livingstone(1990)とMichell・Smith(1990)は他の場で同様の嘆願をしている;本質的に白人男性の貴族的なヒーローについての排他的な年代順のくどい説明であるような歴史を書き続けることに対して我々は弁解の余地はない(Michell and Smith, 1990, p.233)。ヴィクトリア期女性旅行家の貢献を議論することによって、本エッセイは地理学の領域を広げようと試みた。そしてそれは我々がどのようにより包括的な歴史叙述を構築することができるかの一例である。

第二に、ジェンダーの関係性と表象が知識の社会的構築にとって絶対必要なものであることを我々は常に認識していなければならない。専門的地理学の話は大部分が男性の話ー彼らが主要な役者であり書き手であったーであった。しかしこれらの男性はジェンダー関係の社会構造の中に存在してきたのであり、その構造は地理学の歴史にとって文脈(context)と主題(text)双方として役立っている。特に社会構造は少なくとも三つの点において我々の歴史に入り込んでくる。:(1)地理学の慣例ー例えば、本エッセイで提示されたようなフィールド・ワークの慣例は、その使用、合法化、非合法化がいかに明らかに女性の社会的役割や学究的地理学への彼女たちの接近の可能性と結び付いているかを示している。(2)地理学の言説ー調査における質問の公式化そして特定の方法、理論、説明、結果の解釈の発展。例えば専門的地理学の歴史は、男性中心的思考を提言するようなメタファーや理論がちりばめられている。男性中心的思考とは、都市の発展理論の「侵入と遷移」、消費行動研究の「合理的な人」、気候活動の争っている「前線」、「処女」林の概念と言ったものである。Felix Driver(1988)は、19世紀後半の社会科学一般そして後で地理学においていかにこの思考が表面上は混沌とした工業都市を秩序だてそれによって管理するための道徳的企ての一部をなしていたかを示した。またSally Shuttleworth(1990)は、都市生活や都市体系に関するそのような見解は女性を管理するための企てを包含していると指摘した。医学的主題(text)における女性の体や社会科学の著作に見られる都市「体(ボディー)」を説明するために用いられるメタファーを分析して彼女は、都市地理学的調査の価値基準の中立性を信じる者に対して声高のはっきりした一撃を加えた。(3)地理学にとって適切と思われる知識のタイプ。価値基準に中立であり特定の見方に依拠しない客観的な科学への地理学の傾倒は、フェミニスト批評に照らし合わせて、本エッセイを通じて提言されたように、疑問視されなければならない。そのような傾倒はそれ自体疑わしいものである。なぜなら女性探検家の話はなぜどのようにして「客観的な」知識が「主観的な」知識に勝る重要性を与えられるようになったかという問題を提起しているからである。もし地理学的慣例、理論そして言語が社会的それゆえイデオロギー的に構築されてきたものであるならば、それらは真実に対する何か客観的な主張を具体化できるのだろうか?もし地理学の構造が特定の歴史的文脈の産物であり、それらの文脈のバイアスを具体化するものであるならば、それらの構造はそれらのバイアスを反映しまた正当化する。地理学の「科学的」知識という知識の一タイプへの傾倒は、それ自体Sandra Harding(1986)が説得力をもって示してくれたように、男性中心の思考を指し示すものとして見ることができる。

第三に、我々は地理学の歴史の書き直しに再び取り組まねばならない。フィールドの現在の社会構造といかにその構造が我々の慣例を形作っているかを理解すること、そして我々の歴史の書き直しは地理学のフェ

ミニスト歴史叙述(feminist historiography of geography)の一部でなければならない。我々は例えば地理学におけるポスト・モダン言説がなぜ男性優位の議論となってしまったか、GIS[5]への現在の傾倒は同時代のジェンダー関係について何を語っているかを問わなければならない。

結論

最近書き直された地理学の歴史は、その歴史がジェンダー化された構築物であることを無視している。そして地理学におけるポスト・モダン傾向はフェミニスト理論を無視している[6]。地理学のフェミニスト歴史叙述(feminist historiography of geography)は、地理学の社会的慣例と社会全体としてのジェンダーのステレオタイプ化の関係を探求すること並びに地理学における女性の不可視性の特定な歴史的理由と新しい科学的慣例(成文化されたフィールドワークといったような)が知識探求の際の不可欠な副産物であるとする伝統的な信念を再査定することを要求している。このような再考は、女性がそれらの慣例のそれぞれに近づくことができることを基盤とした地理学的パラダイムのもう一つのカテゴリー化を導くことができるだろう(Kelly-Gadol, 1976)。地理学的思想の歴史を文脈化するためには、その慣例、理論、方法の多くがジェンダー化された構築物ということを十分に認識しなければならない。

しかし女性がなぜこの学問から排除されたかを詳しく述べるためには、彼女たちの潜在的な貢献を無視することを覚悟しなければならない。人文地理学を再概念化する最近の試みがあるとすれば、もし地理学が女性の経験や考え方をその規範の中に含んでいたならば、地理学はどんなものであり得たかまたあり得るかを良く考えてみることは価値がある(Belenky 他、1986)。ヴィクトリア期の女性探検家は「科学的」地理学の話から除外された唯一の地理学者グループではないけれども、文書で良く証明された彼女たちの経験は、よりすぐれた人文地理学のための史料を回復するユニークな機会を我々に提供する。彼女たちは、自らの旅の豊かな成果を把握する助けとして小説や旅行談を書き、自分が探検した土地ついてと同じくらい自分自身についての知識を追い求めていたことを率直に認め、異国文化における部外者としての自らの役割のもつ二面性を明白に認識していた地理学者たちであった。ポストモダン地理学を再構築するために、我々ははるか遠くへ目をやる必要はない。ーもし我々が外へ踏み出しさえするなら、それは我々の裏庭にある。

注

1)両者の緊張や両面価値のある関係について最も網羅的に論じた著書として Linda Nicholson 編『Feminism and Postmodernism』(1990)が挙げられる。

2)Annette Kolodny はアメリカ西部の女性の経験に関する彼女の研究において、男性に限定された言語との類似した対決について実証している。(Kolodny, 1984)

3)フェミニズムと科学の実践に関する議論は、多少複雑でしばしば不明瞭な言説であり、フェミニスト分析はより良い科学を引き起こすか、あるいは完全な科学の脱構築になるかに関する論争の回りをしばしば巡っている。最近の概観としては、Harding(1986)および『Women's Studies International Forum』1989 年夏号参照。

4)Janice Monk はアメリカにおける大学の地理学コースと女性地理学者との関係を検証し始めた。予備的な見解としては、Monk(1989)を参照。

5)フェミニストとポスト・モダン批評の双方から告げられた GIS 批判は Curry(1990)の著作に見いだせる。

6)文化人類学における類似した環境の分析としては、Mascia-Lees 他(1989)参照。

参考文献

BABCOCK,B.A. and PAREZO,N.J. (1988) *Daughters of the desert: women anthropologists and the Native American Southwest, 1880-1980* Albuquerque: University of New Mexico Press.

BELENKY,M.F., CLINCHY,B.M., GOLDBERGER,N.R. and TARULE,J.M. (1986) *Women's ways of knowing: the development of self, voice and mind* New York: Basic Books.

BIRD,I. (1879) *A lady's life in the Rocky Mountains* London: Murray.

BIRD,I. (1987) Unbeaten tracks in Japan (Beacon Press, reprinted from an 1880 edition) .(バード,I./高梨憲吉訳(1973)『日本奥地紀行』平凡社)

BIRKETT,D. (1989) *Spinsters abroad: Victorian lady explorers* New York: Basil Blackwell.

CLIFFORD,J. and MARCUS,G. (eds) (1986) *Writing*

culture: the politics and poetics of ethnography Berkeley: University of California Press.

COSGROVE,D. (1988) 'Ideas for a new world: Late Renaissance naturalism and its history', paper presented at the conference, 'What is the Engine of History?' Texas A&M University.

COSGROVE,D. (1989) 'A terrain of metaphor: cultual geography 1988-89', *Prog. in Hum. Geogr.* 13:506-15.

COSGROVE,D. and DOMOSH,M. (1991) 'Author and authority: writing the new cultural geography', in DUNCAN,J. and LEY,D. (eds) *Representing cultural geography* New York: Uniwin Hyman.

CURRY,M. (1990) 'Morality and agency in geographical information systems', paper presented at the departmental lecture series, Department of Geography, San Diego State University.

DANIELS,S. (1989) 'Alchemy and Landscape Art: the chemical theatre of Philipe de Loutherbourg', paper presented at the 1989 IBG meeting, Coventry.

DEAR,M. (1988) 'The postmodern challenge: reconstructing human geography', *Trans. Inst. Br. Geogr. N.S.* 13: 262-74.

DRIVER,F. (1988) 'Moral geographies: social science and the urban environment in mid-nineteenth century England', *Trans. Inst. Br. Geogr. N.S.* 13: 275-87.

DUNCAN,J. and DUNCAN,N. (1988) '(Re)reading the landscape', *Society and space* 6:117-26.

FRANK,K. (1986) *A voyager out: the life of Mary Kingsley* New York: Ballantine Books.

FRANKLIN,S. (1985) *Luce Irigaray and the feminist critique of Language* Women's studies occasional papers No.6, Canterbury: University of Kent.

GOODCHILD, M. F. and JANELLE, D. G. (1988) 'Specialization in the structure and organization of geography', *Ann. Ass. Am. Geogr.* 78:1-28.

GROSZ,E.A. (1987) 'Feminist theory and the challenge to knowledges', *Women's Stud. Internat. Forum* 10:475-80.

HARDING,S. (1986) *The science question in feminism* Ithaca: Cornell University Press.

IRIGARAY,L. (1974) *Speculum de l'autre femme* Paris: Editions Minuit.

KELLER,E.F. (1985) *Reflections on gender and science* New Haven: Yale University Press.

KELLY-GADOL,J. (1976) 'The social relation of the sexes: methodological implications of women's history', Signs: *J. Women Soc.* 1:809-23.

KOLODNY,A. (1984) *The land before her: fantasy and experience of the American frontier, 1630-1860* Chapel Hill: University of North Carolina Press.

LIVINGSTONE,D. (1988) Science, magic and religion: a contextual reassessment of geography in the sixteenth and seventeenth centuries', *Hist. Sci.* 26:269-94.

LIVINGSTONE,D. (1990) 'Geography and modernity: past and present', paper presented at the AAG meeting, Toronto.

MASCIA-LEES, F. E., SHARPE, P. and BALLERINO, C. (1989) 'The postmodernist turn in anthropology: cautions from a feminist perspective', Signs: *J. Women Cult. Soc.* 15:1-29.

MIDDLETON,D. (1982) *Victorian lady travellers* Chicago: Academy Chicago.

MITCHELL,O. and SMITH,N. (1990) 'Bringing in race', *Prof. Geogr.* 42:232-33.

MONK,J. (1989) 'Women geographers and geographic institutions, 1900-1950', paper presented at the 1989 AAG meeting, Baltimore.

NICHOLSON,L.J. (ed.) (1990) *Feminism/postmodernism* New York: Routledge.

OLDS,E.F. (1985) *Women of the four winds* Boston: Houghton Mifflin Co..

QUONIAM,S. (1988) 'A Painter, Geographer of Arizona', *Soc. Space* 6:3-14.

SAID,E. (1979) *Orientalism* New York: Vintage Books. (サイード,E.W./今沢紀子訳 (1986) 『オリエンタリズム』平凡社)

SAYERS,J. (1987) 'Feminism and science -reason and passion', *Women's Stud. Internat. Forum* 10:171-79.

SHUTTLEWORTH, S. (1990) 'Female circulation: medical discourse and popular advertising in mid-Victorian era', in JACOBS, M., KELLER, E. F. and SHUTTLE WORTH, S. (eds) *Body / politics: women and the discourses of science* New York: Routledge.

STODDART, D. (1986) *On geography* New York: Basil Blackwell.

TINLING, M. (1989) *Women into the unknown: a sourcebook on women explorers and travelers* New York: Greenwood Press.

Women's Studies International Forum (1989) 12, 3.

WRIGHT,J.K. (1947) 'Terrae incognitae: the place of the imagination in geography', *Ann. Ass. Am. Geogr.* 37:1-15.